主への従順・備えられた祝福　　**マルコ 16:15～20**

ある歴史と規模のある教会のベテランの先生がこんなことを言っておられました。「教会が伝道に励む時にたいていの教会や教会員の問題は解決するものです」と。最初、聞いた時には「それは教会の働きを進めている牧師や教職者の側の思いであり、日々の様々な問題の中で葛藤しながら歩んでいる信仰者にとっては関心のないことではないか」と思っていました。しかし聖書を見てゆきますと神様の祝福を受けたり、神様のみわざやしるしを見せていただくにあたって一つの法則のようなものがあることに気づかされます。それは非常にシンプルなことですが「神の御心を受け止め、それに従う時に、神は祝福し、様々な恵みを与えてくださる」ということです。それは旧約においてはアブラハムであり、モーセの歩みに見られます。アブラハムは神の「わたしが示す地へ行きなさい。そうすれば、・・あなたを祝福し、あなたの名を大いなるものとする。」創世記 12:1,2 のことばを聞いて従いました。その結果、神からの祝福を受けたことが旧約聖書に記されています。クリスチャンにとっては新約において主イエスのみ心に対する応答が重要です。今日は主イエスへの従順とその結果、受ける祝福と恵みについて見てゆきたいと思います。

１）イエスの従順と受け取られた栄光

使徒信条はこう言います。「主は聖霊によりてやどり、処女マリヤより生れ、ポンテオ・ピラトのもとに苦しみを受け、十字架につけられ、死にて葬られ、陰府（よみ）にくだり、三日目に死人のうちよりよみがえり、天に昇り、全能の父なる神の右に座したまえり。」

同様のことがピリピ 2:6-8 に記されています。「キリストは、神の御姿であられるのに、神としてのあり方を捨てられないとは考えず、ご自分を空しくして、しもべの姿をとり、人間と同じようになられました。人としての姿をもって現れ、自らを低くして、死にまで、それも十字架の死にまで従われました。」

続くピリピ 2:9-11 にはこうあります。「それゆえ神は、この方を高く上げて、すべての名にまさる名を与えられました。それは、イエスの名によって、天にあるもの、地にあるもの、地の下にあるもののすべてが膝をかがめ、すべての舌が「イエス・キリストは主です」と告白して、父なる神に栄光を帰するためです。」ここにはイエスは父なる神様のみ心に従われたので栄光をお受けになったことが言われています。しかもイエスおひとりが栄光を受けるためではなく、私たちにも同じ栄光が与えられると言うのです。

十字架の前夜、イエスは、「わたしがいるところに、あなたがたもいるようにするため」（ヨハネ 14:3）天に帰るのだと弟子たちに語られました。そして、「父よ。わたしに下さったものについてお願いします。わたしがいるところに、彼らもわたしとともにいるようにしてください」（ヨハネ 17:24）と祈ってくださいました。使徒信条の「三日目に死人のうちよりよみがえり、天に昇り、全能の父なる神の右に座したまえり」と信じ、告白する者には、イエスの復活の勝利や天の栄光がその人のものとなるのです。イエスが死に打ち勝った勝利は、同時に、イエスを神の御子、救い主、主と信じる者の勝利ともなるのです。神の祝福と恵みをいただく道筋はもう出来ているのです。

２）イエスに与えられた神の全能の力と主権のすべて

イエスのおられる天の御座は「神の右の座」と呼ばれています。ルカ 22:69 では「だが今から後、人の子は力ある神の右の座に着きます」と、イエスご自身が宣言しておられます。他にも少なくとも新約において 4 箇所(ローマ 8:34、エペソ 1:20、コロサイ 3:1、ヘブル 1:3、ヘブル 10:12)は、キリストが「神の右の座」に着いておられると言っています。ではこの「右」というのは何を意味するのでしょうか。

聖書に「主の右の手は高く上げられ、主の右の手は力ある働きをする」（詩篇 118:16）、「まことに、わたしの手が地の基を定め、わたしの右の手が天を延べ広げた」（イザヤ 48:13）とあるように、「右」は「力」を表します。神はその力ある手で主を信頼する者を救うと約束されました。イザヤ 41:10 に「恐れるな。わたしはあなたとともにいる。たじろぐな。わたしがあなたの神だから。わたしはあなたを強くし、あなたを助け、わたしの義の右の手で、あなたを守る」とあり、同じく 41:13 には「わたしがあなたの神、主

であり、あなたの右の手を固く握り、『恐れるな。わたしがあなたを助ける』と言う者だからである」とあります。神は、助けを求めて差し出す私たちの手をご自分の右の手で、しっかりと握りしめ、決して離さないと言われるのです。もし、私たちが自分で神の手を握りしめているだけなら、信仰が弱くなって、手を離してしまうこともあるでしょう。しかし、神が私たちの手を握りしめていてくださるなら安心です。親が子どもの手をしっかり握って一緒に歩けば、子どもが迷子にならないのと同じです。詩篇に「あなたの右の手で救い、私に答えてください」（詩篇 60:5、108:6）とあるように、私たちも神の力ある右の手を求めて、信仰の手を差し出し、神の備えてくださった祝福をいただきたいと思います。

このように、「右」という言葉は「力」を表します。ですから「神の右の座」というとき、それは、神のすべての力が働く、最高の権威の座であることが分かります。イエスが「神の右の座」に着いたのは、神の全能の力、主権のすべてが、イエスに与えられたということです。「神の右の座」は、王座です。それは、イエスがあらゆるものの主であると宣言しているのです。

信仰者もまた、世にあってさまざまな苦しみや悩みを受けます。四方八方がふさがってしまったかのような窮地に立たされることもあります。しかし、たとえ八方ふさがりでも、信仰者には上が開いています。天が開いているのです。「天が開いている。」これは苦しみの中で行き場所がないように感じるとき、大きな慰めです。救いです。神は信仰をもって天を仰ぐ者を必ず顧みてくださいます。ステパノは人々が敵意をむき出しにして彼に押し迫ってきたとき、天を見上げて言いました。「見なさい。天が開けて、人の子が神の右に立っておられるのが見えます。」（使徒 7:56）ステパノは神の右におられるイエスに力づけられ、また、神の右におられるイエスを証しして、天に凱旋しました。私たちも、困難の中でこそ、天の御座を見上げ、主を信じ、それは主のことばに従うことでもありますが主からの栄光を受ける者とさせていただきたいと思います。

３）主イエスのみ心と配慮

イエスは神の右の座に着いておられる王なるお方です。では、イエスは、その御座から、どのようにご自分の国を治め、導いているのでしょうか。イエスの最初の弟子たちは、イエスの昇天に際して、イスラエルの復興を期待しましたが、イエスは、そのことの前に、福音がエルサレムからはじまってユダヤ、サマリア、地の果てまでも広がり、国境や人種を越えて、神の国が全世界のすべての人に及ぶと言いました（使徒 1:6-8）。実際、ごくわずかな年月の間に、福音は様々な民族や階層の人々に伝えられ、各地に教会が生まれ、神の国は広がっていったのです。イエスが天に帰り、その御座に着く目的のひとつは、世界宣教がなされ、それによって神の国がひろがっていくためだったのです。

イエスはヨハネ 14:12 で「まことに、まことに、あなたがたに言います。わたしを信じる者は、わたしが行うわざを行い、さらに大きなわざを行います。わたしが父のもとに行くからです」と言いました。イエスが天に帰ったあと、弟子たちはイエスが行ったよりも「さらに大きなわざ」を行うようになるというのですが、いったい、イエスが行うよりも大きなわざというものがあるのでしょうか。誰もイエスがなさった以上のことができるはずがありません。けれども、それがあるとしたら、それは世界宣教だと思います。イエスはご自分で、また、十二弟子や七十二人の弟子たちを通して、ユダヤの各地に宣教しましたが、それでもすべての町や村を巡ることはできませんでした。また、イエスの宣教はユダヤに限定されていました。地上のどこかにいて、同時に全世界を行き巡ることは不可能だからです。しかし、天の王座に着いた後、イエスは、ご自分を信じる者に聖霊を注ぎ、その人たちをご自分の証し人にすることによって、全世界への宣教を開始したのです。

イエスは復活ののち、弟子たちに「全世界に出て行き、すべての造られた者に福音を宣べ伝えなさい」（マルコ 16:15）と命じ、それから「天に上げられ、神の右の座に着」きました（マルコ 16:19）。イエスは宣教を弟子たちに委ねました。しかし、それは、弟子たちに宣教を丸投げして、ご自分はそこから手を引くということではありません。マルコ 16:20 に「主は彼らとともに働き、みことばを、それに伴うしる

しをもって、確かなものとされた」とあるように、イエスご自身が、弟子たちとともにいて、宣教しておられるのです。

マタイ 28:18-20 では、イエスは弟子たちに、宣教の命令とともに二つの約束を与えられていることを教えました。一つは「わたしには天においても地においても、すべての権威が与えられています」で、ふたつ目は「わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたとともにいます」です。イエスが「わたしには天においても地においても、すべての権威が与えられています」と言ったのは、イエスが神の右の座に着くことを指しています。「わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたとともにいます」というのは、たとえ、イエスが天に帰っても、その神の右の座から、絶えず弟子たちに力を注ぐという約束です。

イエス・キリストは神の子であるにもかかわらず人として生まれ、十字架の死に至るまで父なる神様に従われました。また父なる神様が御子なるイエスには神の国の福音を伝えるという使命を与えられました。その父なる神様のみ心に忠実にしたがわれた時に不思議なみわざが数多くなされました。この関係は私たちと神の右の座に座しておられるイエスとも同じ関係が成り立ちます。すなわち主イエスのご命令、特に大宣教命令を信じ受け止め、そして従う時に主は不思議なみわざを成し遂げてくださるということです。主は信じ従う者に祝福を与えようと備え、待っておられます。ただ私たちが信じ従わなければ得ることはできません。

イエスは今も、神の右の座に座しておられます。初代教会が、その御座を仰ぎ、そこから力を得、導きを得たように、今日の私たちも、神の右に座しておられるイエス・キリストにまっすぐ目を向け、このお方によって、大きなわざを行う者となりたく思います。